

特集  
Ⅲ



藤の花咲く高瀬川

# ふるさとへの想い、 それぞれの決断



住み慣れたふるさとを離れ、過ごしてきた10年という歲月。  
そこには様々な思いを抱えながらも、  
前へと歩んできた道がありました。  
浪江に戻って暮らしを再開した方、浪江を思いながら新しい暮らしを始めた方、  
いずれは浪江に戻りたいという方――。  
住むところは違っていても、私たちが浪江を思う気持ちは一つです。

津波の犠牲となった両親が  
心の中で生き続け  
今も自分を支えてくれています。

宮城県仙台市在住  
鍋島 悠輔さん



あの地震が起きた時は請戸小学校の1年生でした。放課後に通っていた児童クラブの先生の車に乗り、避難しました。途中、振り向きざまに見た大津波を今も覚えています。運良く津波から逃れることができ、数日後、姉と無事再会することができましたが、海の目の前に住んでいた祖父母と、二人を車で迎えに行った父と母は帰らぬ人となってしまいました。それからは、神奈川の祖父母の元で姉と暮らし、高校進学を機に浪江に近い仙台に越して寮生活を送っています。いつもそばに置いて大切にしているものがあります。それは、神奈川の祖父から譲り受けた、父が神職を務めていた茗野神社で撮ってもらった私の写真です。両親は津波に襲われて亡くなってしまいましたが、自分の心の中で生き続け、夢で時々語りかけてくれます。浪江へはお墓参りに出かけるくらいですが、家族で過ごした楽しい思い出が残る大切な場所が変わりありません。



陶芸で結ばれた人々の輪が  
大堀相馬焼の長い歴史をつなぐ。

本宮市在住  
大堀相馬焼 春山窯  
小野田 利治さん



地震時は本焼準備のため窯詰め作業をしていました。重さ2トン以上ある窯がガタガタと動き出すほどの揺れでした。その後は県内外を避難しながら、3人の子もたちを守ることで精一杯でしたが、県内の応急仮設住宅に移り少し落ち着くと、代々続いた窯の火を絶やすことはできないという気持ちが湧き上がり、震災の翌年7月にいわきで仮設工房を立ち上げました。その時何よりありがたかったのは、長年交流してきたいわきの陶芸教室の生徒さんからのご協力でした。工房の土地の紹介から机などの備品提供まで、生徒さん自身が大変な時期にお世話になりました。2017(平成29)年には自宅と工房を本宮に移し、浜通りや中通りの方とも交流を広げています。でもいつか、浪江に拠点を作りたい。大堀は昔も今も落ち着ける所です。また、次の目標に向かって一歩また一歩と前進あるのみ。もう少し頑張っていきたいと思っています。



父が津島で牧場を始めたのは、私が生まれた1961(昭和36)年。その跡を私が継ぎ、乳牛の品評会で福島県のグランドチャンピオンになるなど高い評価をいただいていた。しかし、開場50年の年に震災が起きました。まだ幼い子どももいたので、家族は遠方へ避難させましたが、手塩に掛けた牛たちを置き去りにはできず、県内の空き牛舎を探し回りました。幸い本宮市に候補地が見つかったので、牛60頭の世話をしながら津島と本宮を2週間往復し、埃まみれの牛舎を整備しました。兄夫婦と一緒に立ち上げた牧場でしたが、収容力に限りがあり、現在は妻と二人で牛の世話にあたる毎日です。津島は青々とした牧草が広がる酪農にもってこいの土地でした。震災から10年経ってもふるさとで酪農を続けたいという気持ちは変わりません。北海道の大学で酪農を学ぶ長女が跡を継いでもいいように、移転して将来に備えたいと思っています。



父が自分にしてくれたように。  
確かな酪農のバトンを  
次の代へ渡してあげたいから。

本宮市在住  
今野 剛さん



帰還への祈りを込めて  
「親父の小言」を  
一文字一文字したためています。

茨城県土浦市在住  
梶台 俊夫さん



震災が起きて、当時単身赴任で働いていた新潟県の柏崎市へ家族で避難し、皆さんから大変親切にしてくださいました。震災から5年後、会社を退職し、長女夫婦が暮らす茨城県土浦市に移りました。先祖代々暮らしてきた室原地区は、現在も帰還困難区域となっており、傷みの激しい自宅は解体を予定しています。住まいの周辺を除染して放射線の数値が下がっても、周囲に広がる広大な山々を除染するのは困難です。帰還したとしても周囲の人たちが数軒帰ってくるか来ないかでは、コミュニティの再生は難しい状況です。土浦では、念願だった書道教室を開き、小学生から大人まで書道を教えています。故郷は遠く離れてしまいましたが、浪江町はご先祖様も眠る切っても切れない特別な場所。せめて一人でも多くの町民の帰還がかなうよう祈りを込め、折あるごとに「親父の小言」の一文字一文字をしたためています。

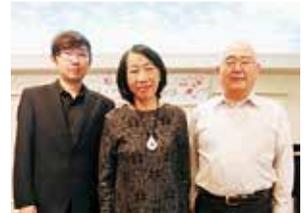


音楽とともにあった浪江での日々。  
それをつないでいくことが、  
今の自分にできること。

東京都世田谷区在住  
有限会社マイケル企画  
添田 隆幸さん  
みつえさん



建築士として全国を転々としていましたが、私の地元・相馬市に近い浪江町に落ち着くことになって27年。浪江は第二の故郷です。町内の建設会社で働きながら妻の音楽教室のサポートを続け、やがて有限会社マイケル企画を設立。浪江町に音楽の芽を育てるお手伝いをしてきました。日々の教室、全国ピアノコンクール…、どれも楽しい思い出ばかりです。妻が企画したコンサートも開催。教室出身の生徒たちが音大を卒業し、大きく成長して戻ってくるようになったある日、震災が起きました。入院中の義父の転院先を求め、目茶苦茶になった自宅を後にしました。現在は妻の実家がある東京都内で、息子でピアニストの哲平らとともに添田音楽教室を続けています。浪江での日々があったから今がある。連絡を取り合う友人もあり、これからも忘れることはありません。町で育てた音楽の芽をつないでいきたいと思っています。



町民が集える場を提供して  
浪江の復興を後押しできたなら。

宮城県仙台市在住  
焼肉これすけ  
木村 信之さん



家族とともに仙台市に移住し、飲食店の修業を5～6年した後、2017（平成29）年に一念発起して、両親の暮らす福島市で念願の独立を果たしました。現在は、福島市で家族と暮らす準備を進めているところです。お店には、浪江町の友人や先輩、両親と交友のある方などが来てくださいます。地元の浪江町は、帰ってみなで集える環境がまだ完全には整っていないので、うちのお店がそんな場を提供できるようになればと思っています。これからは「浪江の人間がやっているお店」ということをもっと発信したいです。震災前の浪江町は、町の規模に対して飲食店の数がとても多く、まちなかは夜まで賑わっていました。私が飲食業に興味をもったのも、そうした活気を見続けてきたからかもしれません。飲食店の一経営者として、昔のような賑わいがある浪江町を取り戻すために、将来を見据え、自分にできることをやり続けたいと思います。



祖父が昭和初期から新聞販売を始めて、私は三代目です。2年間、東京の新聞店での修業を経て、2010（平成22）年に27歳で経営を引き継いだ直後に、震災が起きてしまいました。地元にあつての新聞販売店ですから、避難時には廃業を考えていました。浪江で帰還準備の宿泊が始まると、帰還希望の方からインフラの心配とともに、新聞配達の有無の問い合わせが役場にあつたと聞いています。役場からの要請や私たちを支えてくれた地元の皆さんのためにも、浪江に戻る決意をし、2017（平成29）年1月から新聞販売を再開しました。お客様は高齢の方やひとり暮らしの方もいらっしゃいます。私の役割は新聞を届けるだけでなく、地域の問題を伝える話し相手としての役割も担っているため、販売店を続けてみたいと思います。やはり町の活力は人。元住民の方もそうですが、新しく移住する若い方にも住みやすい町になってほしいと願っています。



お世話になったお客様に恩返しを。  
新聞と一緒に「今の浪江」を届ける。

浪江町在住  
有限会社鈴木新聞舗  
鈴木裕次郎さん



町の電気屋さんとして頼られる喜び。  
その気持ちを胸に復興を支える。

浪江町在住  
有限会社アクト  
阿久津雅信さん



震災の時は現場で仕事をしており、今まで経験したことのない揺れに襲われました。自宅に戻ると津波警報を知らせる防災無線が流れており、街なかまで津波が来るのか半信半疑で避難しました。一家7人と愛犬で身を寄せた津島地区では、仲間と交通整理を手伝いました。原発事故が起きたことが報道されると、避難所はパニックに陥りました。私は爆発の煙を実際に見たので、急いで県外に逃げる決断をしました。最終的に落ち着いた秋田県由利本荘市では、市の臨時職員として勤めました。震災から数カ月後には馴染みのお客様から家電製品などの注文の電話がかかってきて、自分は必要とされていることがうれしかったです。翌年には南相馬市で営業を再開し、福島県内外に散らばるお客様のもとを回りました。2019（令和元）年には、浪江で新店舗を立ち上げることができました。これからも「お客様第一」をモットーに、頼っていただける“まちの電気屋さん”として、復興を後押ししていきます。

